

陽明学関係書 紹介と短評

○『二松学舎創立百二十周年記念陽明学論叢』

平成九年一〇月、学校法人二松学舎発行、非売品。

A5版、二四〇頁。

本書は一八七七年明治一〇年創立の二松学舎が三たび甲の周ったこの丁丑の年を記念し、学祖にして陽明学者である三島中洲の遺徳を偲んで編まれた論集であり、小林日出夫二松学舎理事長の序をはじめ、学舎の同窓・教員らの九本の論考を収める。王学核心の探索 洪樵榕、「陽明学」原義考―その儒教倫理と顕彰に論及― 中田勝、王陽明の出仕と隠逸について―「江西詩一百二十一首」を一つの手掛かりにして― 渡部英喜、続「超凡入聖」ということ (I)―陽明の部― 望月高明、王陽明の親民思想 上野努、良知良能説の展開 (二) 中根公雄、母意の説 松川健二、中江藤樹の書について 寺山葛常、三島雷堂の学問と思想―陸王哲学研究を中心として― 濱久雄、と並ぶなか、ここでは巻軸の濱論文を紹介、短評を試みることにする。

濱久雄氏は元大東文化大学教授であり、非常勤講師として二松学舎にも出講された公羊学の専門家である。この論文の「はじめに」を掲げよう。

三島雷堂は中洲先生の末子で、陸王哲学の研究者として知られ、中洲翁の晩年にその衣鉢を継いで二松学舎長に就任し、

家学の発展に尽された。中洲があまりにも偉大な存在であり、かつまた雷堂が四七歳(數え年)の若さで道山に帰した不運も加わり、その学問と思想についても、忘却されている憾みなしとしない。しかし、その遺著である『哲人山田方谷』・『陸象山の哲学』・『王陽明の哲学』は、今日においても高く評価されている。

私の先考青洲は中洲先生晩年の弟子であり、また雷堂先生の受業であった。特に『陸象山の哲学』が上梓された時はその校定に従事し、さらに跋文を書いている関係上、私はつとに雷堂先生には強い関心を抱いてきた。本稿ではこれらの遺著を通して、三島雷堂の学問の方法と思想の特色等につき考察を加え、二松学舎大学創立一二〇周年にちなみ、その伝統的学風を回顧するとともに、雷堂先生が遺された業績を顕彰するものである。

右のごとき目的で執筆されたこの論文は、一、三島雷堂の人となり、二、『陸象山の哲学』に見える学問の方法と思想、三、『王陽明の哲学』について、おわりに、から成る。「一」および「おわりに」のなかで注目される話柄の一つは、『王陽明の哲学』の一九〇九年の脱稿、一九三四年の刊行という事実と纏わる「不運」である。これに「はじめに」に述べられたいま一つの「不運」を重ねて重く受け止めた濱氏の筆は、感慨已まず、自ら伸びたのである。

「三」のテーマに関しては、夙に山下龍二氏に紹介の仕事(『陽明学の終焉』所収、他)があるが、濱論文は紙幅を費やしただけに、

決して屋上屋を重ねたようなものではない。「門人」「学系」の分野に筆の及んでいぬ点、後進への親切をいささか欠くかと思われるが、ともあれ、時宜を得た撰文ではあった。

○『日本陽明学派の人々の書』

平成九年十月、学校法人二松学舎発行、明德出版社発売。

B5版、一二〇頁。

本書は、前掲『陽明学論叢』と同様の趣旨によって編まれた冊子。二松学舎千代田校舎と湯島聖堂を会場に、この時期、記念行事の一環として、『日本陽明学派遺墨展』が催されたが、その図録ということである。中江藤樹の『致良知』をはじめとして、熊沢蕃山・北島雪山・三宅石庵・三輪執斎・中根東里・佐藤一斎・大塩中斎・吉村秋陽・山田方谷・林良斎・春日潜庵・池田草庵・西郷南洲・河井継之助・吉田松陰・三島中洲・東沢瀉・山田済斎・安岡正篤と並ぶ墨跡は聚って八〇頁に及び、一葉ごとに刮眼せずにはおれぬ上質のもの、是非一度手にして鑑賞されたい。巻末に「日本陽明学派の人々略伝」及び「作品目録」を付し、各人の事蹟・作品ごとのヨミを示した点もありがたい。

本冊子は併せて解説論文をも収める。福田殖Ⅱ王陽明の「良知」説の特色、疋田啓佑Ⅱ「客座私祝」について、寺山葛常Ⅱ日本陽明学派の人々の書、松川健Ⅱ東沢瀉の生とその書、中田勝Ⅱ二松学舎の陽明学―方谷・中洲・済斎、の五本。中に就いて寺山葛常(旦中)氏は、本冊子の監修者として御労苦があった。なお、編集委員代表、大畑茂雄氏の「編集後記」によると、資料の提供先は、個人・機関を合わせて三六の多さを算える。実務に当たっ

た編集委員の御労苦もまた俾ばれる。総じて、学舎の理事長、小林日出夫氏の指導宜しきを得て成った好企画であった。

(以上、松川)

○岡田武彦著『王陽明紀行―王陽明の遺跡を訪ねて―』

平成九年八月、登竜館発行、明德出版社発売。

A5版、四二七頁。

本書のサブタイトルに王陽明の遺跡を訪ねてとあるように、岡田武彦氏を中心とする陽明学研究に関係のある人々の、昭和六十年八月から平成八年十一月に至るまでに行われた6回の探訪の記録である。

第一章 夢は江南へ(昭和六〇年八月、第一回)

王陽明の生誕地であり、講学処(中天閣)のある余姚市、王陽明の墓地や旧居跡のある紹興市、ほか無錫、蘇州などを巡遊。

第二章 再び王陽明の遺跡を訪ねて(六二年十一月、第二回)

王陽明の墓碑の再建計画を持って余姚へ。陽明の生まれた瑞雲楼の居跡。紹興の要人と墓碑の再建の検討。

第三章 竜場訪問と陽明墓の除幕(六三年三月、第三回)

王陽明の左遷された竜場の陽明洞、王陽明墓碑修復の除幕式、その後、陽明学国際学会。

第四章 陽明晩年の遺跡探訪(平成四年四月、第四回)

王陽明が晩年、寧王宸濠の反乱や少数民族の反乱を鎮撫するため遠征した広西省の思恩、田州などの遺跡。遠征の帰途、急逝した青竜鋪。この地には、後年(一九九四年)落星碑が建てられた。

第五章 瑞雲楼の修復と陽明洞再訪(平成八年、第五、六回)